

出演 指揮：三石精一 ピアノ：小川典子 ソロ・コンサートマスター：後藤龍伸
曲目：リムスキー＝コルサコフ／交響曲第2番「アンタール」、交響組曲「シェエラザード」
プロコフィエフ／ピアノ協奏曲第3番
お問い合わせ：ユニフィルチケットセンター TEL03-3974-6557

二人のソリストへの期待
——今回はヴァイオリンの後藤龍伸さんが出演されますね。
三石 ええ。実は後藤さんは数年前、固い決意の元に東京を去られて、「東京ではもうやらない」とおっしゃっていらしたんです。それでも絶対に弾いてもらおうと思つて、メールでどうとう口説き落とししたのは良いのですが、実は彼は「シェエラザード」も弾かない、という宣言もしていたそうなんです(笑)。だから今回は「必ずいぶん思い切つた行動を取つてくれました」と思いますし、東京に出てきてくれることによつて、彼の世界がまた広がつてくれればと思つています。
——後藤さんコンマス起用にどんな期待をされていますか？
三石 例えば「シェエラザード」のソロなんかは、正確に弾くだけでは全然面白くなくて、色気のようなものが必要ですが、その点彼のヴァイオリンは本当に音楽的で大好きなんです。ユニフィルのヴァイオリンのメンバーにもぜひに聴かせたいですし、

良い刺激になつてくれればと。
——プロコフィエフのピアノ協奏曲第3番を弾かれる小川典子さんにも期待ですね。
三石 小川さんは彼女が高校を出られた頃、麻生フィルというアマオケで初めてコンチェルトを弾かれた時から、何度も一緒に練習しています。僕の「指揮者生活50周年」記念コンサートの時もロンドンからそのために駆けつけて下さつて、「演奏会に向けて体調を整えるために、今回はビジネスクラスに奮発してやってきました」とおっしゃつて下さるなど、人柄もすごく良い方です。僕の大好きなピアニストですね。
——リムスキー＝コルサコフと同じロシアの作曲家ということでの選曲でしたか？
三石 そうですね。「アンタール」も「シェエラザード」も同じようなアラブの雰囲気なので、その間に少しさっぱりとしたものを入れようかと。小川さんの十八番ですので、ぜひ大勢の方に聴いて頂きたいですね。

精度の高い演奏と 楽員の意気込みに手応え
——ユニフィル設立からの10年を、どのように振り返られていますか？
三石 オケが出来た当初からのビジョンで「皆さんがよく知っている曲を、他のオケがやるよりもずっと磨きをかけて、お客様に聴いて頂く」、これを10年間通してやってきました。練習を緻密にたくさんやるものですが、密度の濃い、精度の高い演奏をお客様に提供できたのではないかと思います。また、そのことにより、楽員の精神が「いい加減にはなく、一生懸命がやろう」と、アマチュアのオケが演奏会に向けて、半年くらいかけて練習する意気込みのような雰囲気が生まれてきました。それがユニフィルの一番の特徴ではないかと思つています。精度の高い演奏と楽員の意気込みが、他のオケとはちよつと違うのではないかと。それを育ててこられたのが一番の成果でしょう。昨年10月の定期での、マラー

——「復活」なども、メンバーの大部分がこの曲を未体験であったために、既成概念が無い分、かえつて新鮮な響きが生まれ、とても良い演奏が出来たと思つています。
次なる10年に向けて：
——今回が次なる10年に向けての最初の定期になります。今後ユニフィルをどのようにしていきたいとお考えですか？
三石 まず経済的基盤を固めることですね。そして定期演奏会の回数も、だんだんに回数を増やして、年6回くらいまではいきたいと思つています。またいづれは、いろいろな優秀な若い指揮者にも振つて頂けるようにしていければと思つています。
——ユニフィルの益々の発展と、先生のご活躍を心よりお祈りしております。ありがとうございます。

Interview

ユニフィル、11年目の新たな挑戦

訊き手 編集部

三石精一 Mitsunishi Seichi (指揮者)



三石精一：東京芸術大学指揮科卒業。1956年メノッティ作曲歌劇「オールドミス」「電話」の指揮でデビュー。1959年にはブリテン作曲歌劇「小さな煙突掃除」、ラヴェル作曲歌劇「スペインの時」を初演するなど、当初は主にオペラ、バレエで活躍し、脚光を浴びる。1977年文化庁芸術家在外研修員として派遣され、ウィーンフィルとミュンヘン国立歌劇場で研鑽を積み、1978年に帰国。1979年読売交響楽団専任指揮者に迎えられ、1981年の同楽団ヨーロッパ公演では、東ベルリンなどで大成功を収める。1986年退団後、全国各地のオーケストラに客演して活躍する一方、東京音楽大学指揮科主任教授として後進の指導にあたり、2002年同大学名誉教授となる。1997年東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督・常任指揮者に就任する。社団法人青少年音楽協会会長、日本指揮者協会顧問。

1997年の設立以来、音楽監督として東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団を育ててきた三石精一氏。昨年からNPO法人自主公演運営機構を立ち上げ、定期演奏会を運営面からも精力的にリードする。4月の定期演奏会の聴きどころを中心に、ユニフィルへの思いなどについてお話を伺った。

リムスキー＝コルサコフ 没後100年を記念して：

——今度の定期ではリムスキー＝コルサコフがメインということ、「シェエラザード」以外なかなか演奏されない中で、意義の大きいプログラムですね。
三石 そうですね。今年が没後100年ということを取り上げてみました。特に交響曲「アンタール」などは、アマチュアの記録が3回くらいあるらしいですが、プロのオケでは日本で初めてらしいですね。「皆さんが聴いたことのない曲を紹介する」こともオーケストラの1つの使命ですから、いい機会なのでご紹介しようと思つました。

——交響曲「アンタール」はどんな雰囲気曲ですか？
三石 4楽章形式で、アラブ風のエキゾチックな雰囲気が特徴です。「シェエラザード」の、言わば下書きと言つてはなんですか、だいたい同じような傾向の作品ですね。若い頃の作品で、オーケストラレコーディングもまだそれほど派手ではありません。今回も改訂していて、今回演奏する1897年版では、リムスキー＝コルサコフは「交響組曲」という副題をつけて出したそうです。

それにしても、リムスキー＝コルサコフという人はほとんど独学みたいなもので、オーケストラレコーディングを誰かに習つたということがないんですね。ペルリオーズの「管弦楽法」を参考にしたりしますが、よほど才能があり、楽器に対する感覚が優れていたんでしょうね。彼自身海軍の軍楽隊で指揮をやつていましたから、管楽器への知識や実体験が身に付いていたようですね。

